

知的障害者向けのわかりやすい情報提供のテキストの傾向 —「ステージ」の経年変化の分析から—

打浪 文子* 熊野 正** 田中 英輝** 後藤 功雄** 美野 秀弥** 岩田 一成***

*淑徳大学短期大学部 **NHK 放送技術研究所 ***聖心女子大学文学部

E-mail: ayakogauchinami@gmail.com

1. はじめに

1.1. 背景

2014年に日本が批准した「障害者の権利に関する条約」にも謳われているように、情報化社会の発展に伴う障害者の情報・コミュニケーションの保障は、障害者福祉における重要な今日的課題の一つである。とくに、自己選択や自己決定に難しさを有する知的障害児・者は、情報支援技術の改善と追究のみでは情報アクセスに関する困難が十分に解消されず、情報化社会の中で、ことばに関する複合的な差別および情報格差の下に置かれ続けている[1]。

知的障害者にとっての情報・コミュニケーションの保障とは、言語的に平易な表現、すなわち「わかりやすい」かたちでの情報伝達やコミュニケーションを行うことである。こうした情報提供やコミュニケーション支援は、彼らの社会参加の手立てとして、また権利の保障として重要な手段である。しかし、重度の知的障害者に対するコミュニケーション支援については社会福祉学領域に追究が多い一方で、「わかりやすさ」を重視した言語的な情報保障に関する社会的実践および研究蓄積は非常に少ない[2]。知的障害者の情報の受発信を可能にし、彼らの社会参加を促すためのわかりやすい情報提供に関する言語学的知見を得ることは、喫緊の課題である。

1.2. 本研究の概要と目的

著者らは、知的障害者に対する「わかりやすい」情報提供を実践する媒体である「ステージ」(2.1参照)全69号分のテキスト化を行い、紙面中の原文通りに改行したテキスト¹、および句点で改行したテキストの2種類のデータの整備を進めている。

¹ステージは視線の移動が行いやすいように改行等に視覚的な配慮がなされており(特に54~69号)、句点改行のデータは今後のわかりやすさの認知的および言語的な解明に役立つと考え作成した。なお、この原文通りの改行テキスト、および句点改行テキストのデータは(一社)言語資源協会より2018年3月に公開を予定している。

知的障害者向けの情報をまとめた形でテキストデータ化した事例は国内初であり、本データは知的障害者向けに書かれた文書の言語的特徴、およびわかりやすさにかかわる要素の解明の一助につながると考えている。以下、本研究は本データを使った今後の研究の糸口を与えることを目的に、ステージの概要と先行研究をまとめた後、全69号の全データを自動分析した結果を概観する。経年変化を考察し、知的障害者向けの文書の傾向を明らかにする。

2. 分析対象

2.1. 「ステージ」とは[2][3][4]

「ステージ」とは、社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会により1996年より2014年まで刊行されていた、知的障害者を対象とした新聞の体裁をとる機関誌である。スウェーデンの読みやすい新聞『8 SIDOR』を参照して1996年に創刊された。知的障害者を読者として、全国規模で時事情報の継続的な配信を行っていた紙面媒体としては、国内唯一のものであった。

ステージの編集会議のメンバーは、新聞記者・支援者・軽度または中度の知的障害者・発行媒体である社会福祉法人の編集担当職員・オブザーバー等の約10~20名で構成されていた。障害のある当事者が編集や原稿作成に加わり、原稿の読み合わせを行うことでわかりやすいテキストを作成していた。さらに、2011年6月号から最終号までは、知的障害のある編集委員の一人が編集長を務めていた。

2.2. 「ステージ」の経緯と特徴[2][3][4]

ステージは1996年の創刊時より、年4回発行されてきた。創刊時は5万部、その後1996年から2009年度までは毎号約5500部程度で推移していた。紙面がリニューアルされた2010年度、2011年度は毎号約11000部、2012年度は毎号約12000部を発行するようになった。なお、2013年度以降は、紙面構成等に変更はなかったが、発行部数が2000部以下となった。2014年6月に発行母体である社会福祉

法人全日本手をつなぐ育成会が解散して後は休刊し、2018年1月現在まで休刊となったままである²。

創刊当初から企画・編集の過程に知的障害者が編集委員として編集過程としてかかわるという当事者主体性を有していたため、紙面の内容は、読者の生活年齢と興味・関心に即した話題が選択されていた。創刊当初は毎日新聞社の記者らが複数名記事の執筆や読み合わせの作業に加わり、議論しながらわかりやすさを模索していたため、創刊期は比較的一般的な新聞の紙面に近い構成がなされていたが、次第に「本人活動」³を支援する媒体として、福祉的な内容や当事者の経験等が重視されるようになった。紙面は主に、関心の高い時事の話題、ニュースおよびニュースダイジェスト、趣味・芸能人へのインタビューなどのエンターテインメント、スポーツ、暮らし（障害者福祉や生活に関連する、役立つ特集記事）、各地の特別支援学校の特色ある取り組みの紹介、読者からの反響や交流的要素のある記事、時期ごとのテーマ記事・特集などで構成されていた。

紙面はA3版で8ページ、1996年当時はカラーと白黒の双方が使用されていたが、2010年夏号（54号）以降は紙面およびデザインが一新されフルカラーとなった。特に、54号以降は、テキストのわかりやすさに加え、全体的な見やすさに配慮された紙面構成となっており、写真や図やイラストが多用されていた。また、漢字には全て振り仮名がついていた。さらに、改行時に文節で区切るなど、視線の移動や情報の認知が容易になるような工夫がなされていた。

2.3. ステージに関する先行研究

ステージにみられる平易な文章表現の特徴について、先行研究が数例存在する。

まず、創刊からのステージの実践を経験則からまとめたものがある[3][4]。わかりやすい文書の特徴がステージ編集の経験から示され、ステージの特徴である「のりしろ」が示唆されている。「のりしろ」とは、文と文の間に重複箇所（同じ言葉を繰り返して使用すること）

² なお、電子媒体は2010年以降、個人ではなく団体に限定的に配布されたのみであった。

³ 「本人活動」とは、「(知的障害者)本人による、本人のためのグループ活動」である。決定権の所在は当事者にあり、自らが主体者として活動し感情を共有する場であり、自分たちの生活の権利を主張し、仲間とともに人生設計を行う場でもあるゆえに、「セルフ・ヘルプ」機能、「セルフ・アドボカシー」機能を備えた場であるとされる[5]。

を設定することで両者の関係を明示的にすることである。また「ステージ」7号分の編集過程を扱った質的検討では、リライトの際の難解語彙群の指摘がなされている[2]。

ほかに、ステージの言語的特徴について、他の新聞との比較で特徴を明らかにした研究が数例存在する。毎日新聞の紙面との比較でその傾向を明らかにした計量言語学的調査によれば[6]、ステージの文章はおおむね一文が30文字以下であり毎日新聞より短いことや、四文字以上の漢字列が少ないことが明らかにされている。また、朝日新聞とステージの比較分析では[7][8]、ステージでは解釈に個人的判断を要する語の使用が見られること（時間を示す際に「朝」「夕方」など）、動詞「する」に接続してサ行変格活用動詞となりうる「サ変名詞」や数を表す「数詞」の使用が少ないこと、「また」などの並列の接続詞の使用が多いこと、ステージと朝日新聞で構文の複雑さには差がほとんどないことが明らかにされている。

さらに、「やさしい日本語」によるニュースであるNHKの「NEWSWEB EASY」（以下NWE）との比較調査では[9]、ステージとNWEの共通点として形態素数や和語の率が近いこと、「外来語」や「人の属性を表す語」などの名詞や動詞を中心とした書き換えの難しい難解語彙の群があることが明らかにされている。また相違点として、ステージには「やさしい日本語」の基準に照らせばわかりやすく書きかえ可能な福祉用語（名詞）、副詞相当の語、および接辞（接辞を中心とした名詞接続形式）があることも明らかになっている。

ただしこれらの先行研究のいずれもステージの全号分を対象としたものではなく、テキストや語彙の傾向を示唆するに留まっている。

3. 分析

ステージの1996年から2014年にかけて発行された全69号分のテキストを対象として、計量的分析を行った。

3.1. 分析手順とねらい

ステージの2種類のデータのうち句点改行データを分析した。句点改行データはステージの各号が1ファイルになっている。また1文が1行となっており、見出し、小見出しにはそれぞれを示すタグが行頭に付与されている。そこでまずタグと表層表現を使ってステージ各号を個別記事のファイルに分割した。次に、写真や図のためのキャプション、箇条

書きなどの通常の文とは異なる行を除外した。さらに読者の反響など読者の文体がそのまま反映された記事、ダイジェストニュースなどの特別な記事を、タイトルを使って除外した。

以上の手順で作成したファイルを対象に NEWSWEB EASY と比較した先行研究[9]で測定した項目を 69 号各号で計測して経年変化を観察した。なお計測に使った解析器は全て[9]のものと同じである。

3.2. 文長

各号の 1 文の平均形態素数，すなわち平均文長を算出した結果を図 1 に示す。図に重ねて示した回帰直線から，初期の頃から 4 文字程度，文長が時間と共に短くなったことが観察できる。なお，全号の平均文長（破線）は 20.8 形態素であった。

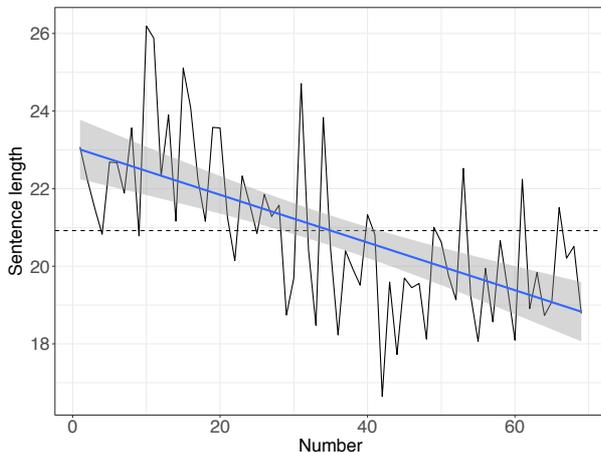


図 1 各号の平均文長（形態素数）

3.3. 形態素の品詞・語種

語種の割合を全 69 号で解析したところ，特段の経年的な変化は観察できなかった。全号の語種の割合の平均と標準偏差を表 1 に示す。標準偏差が小さいことから経年変化が小さかったことが分かる。

表 1 全 69 号の語種の割合

語種	割合 (%)	標準偏差
和語	76.3	2.1
漢語	18.7	1.8
外来語	2.8	0.71
混合	1.1	0.27
不明	1.2	0.36

形態素品詞の割合の変化も同様に観察したが，特に経年的な違いは見られなかった。

3.4. 語彙難易度

語の難易度レベルの変化を観察するため，日本語能力試験の基本語彙（Basic），4 級から 1 級の語，級の付与できない難しい語（OOC），固有名詞（Proper）の割合を，自動解析器を使って各号で計算した[9]。割合を積み上げグラフにした結果を図 2 に示す。

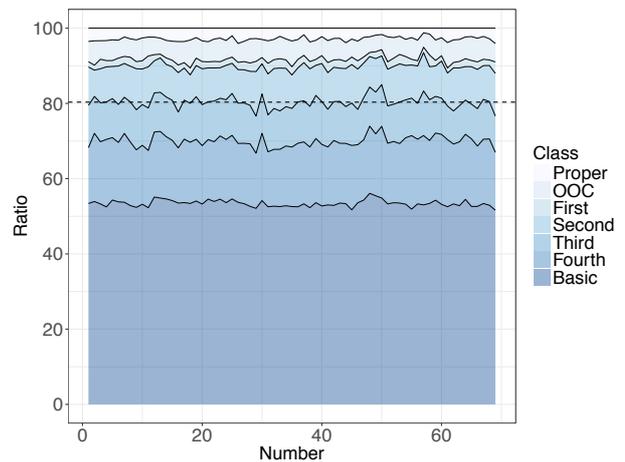


図 2 各号の語の難易度の割合 (%)

図 2 から各号の難易度レベルの割合は経年変化していないことが分かる。なお基本語彙とは助詞，助動詞，数字，記号をまとめた分類で，誰でも分かるやさしい語のクラスと考えている。そこで便宜的に基本語彙，4 級，3 級をやさしい語と考えると，全号でのやさしい語の割合の平均は 80.3% (破線) となった。

3.5. 計量的分析のまとめ

全 69 号の分析結果からは文長が経年的に短くなったことが明らかになった。一方，語種，品詞，語の難易度レベルの各割合はほぼ一定であった。すなわちステージの語彙の使用は安定していたといえる。

4. 考察

全号を通して変化が見られた点と，安定していた点の双方について考察を試みたい。

全 69 号分のテキストから析出された経年変化として顕著な点は，平均文長が短くなったことであった。2.1 に述べたが，知的障害者向けのわかりやすい情報提供に先鞭をつけた社会的実践がステージであり，創刊当初はまだ知的障害者向けの文書はどのようにすればわかりやすくなるのか全く手掛かりがない状

態から、経験則が蓄積されていった経緯がある[3].すなわち、当事者を交えた議論の中で、編集会議時に読み合わせを行う中で文長が短い方が読みやすいという意見が出され、次第にそれがわかりやすさの手法として浸透していったものと考えられる。また、創刊当初は新聞記者のかかわりが多く、記事も新聞記者の原案のものが多かったが[3], 2.1 に述べたように次第にステージの当事者主体性が増す中で、編集者と当事者の意見が通りやすくなっていった結果とも考えられる。さらに、2.2 で述べたように 54 号からはレイアウトが一新されているが、54 号以降は記事作成時にレイアウトにあわせて文長がかなり意識されていた点も、文長の減少に影響を与えた可能性がある。以上より、知的障害者にとってのわかりやすさは文の短さと相関があるといえよう。

一方で、文長以外の語種、品詞、語の難易度レベルの各割合は、ほぼ経年変化がなかったことが示された。ステージは約 18 年の間に多くの新聞記者・編集職員・支援者・知的障害者らが関わっていたにもかかわらず、変化がほとんど見られず安定的であったということは、知的障害者にとってのわかりやすさには一定の形式があることを示していると考えられる。すなわち、今回の分析結果による語種の割合や語の難易度の程度は、軽度から中度の知的障害者のテキスト作成におけるわかりやすさの指標となりうることが示されたといえる。

また、語種等の割合が経年変化を見せず一定であったことは、2.3 で述べたステージの一部を分析した先行研究らによって示唆されていた傾向が有効性のある結果であったことを示すと考えられる。すなわち、本調査の結果によって、これまで示唆されていた知的障害者向けのわかりやすい情報提供の傾向が、実証的に裏付けられたと考えられる。

5. おわりに

本研究では、「ステージ」全 69 号分のテキストの計量的分析から、知的障害者向けに書かれた文書の傾向を、経年変化の様相から明らかにした。

今回の解析では 3.1 で述べたように各号を記事単位に自動分割したが、完全には分割で

きなかった。レイアウトやデザインの変更の影響で、見出しや小見出しの使い方が変わったことが主な原因と考えている。今回は記事認定の信頼性が確保できないため記事の長さを計測しなかったが、記事長はやさしさに関わる要因になるため、今後調査を継続したい。また、ステージは 54 号以降、視線の移動がしやすい紙面改行が工夫されている。この紙面改行データの分析を深め、わかりやすさの傾向をさらに検討することも今後の課題である。

謝 辞

本研究は、平成 27～29 年度日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「知的障害者にわかりやすい情報提供のあり方に関する領域横断的研究」（課題番号：15K12882）の成果の一部である。また、本研究を遂行するにあたり、公立はこだて未来大学特任准教授の大塚裕子氏にご助力頂いた。記して謝する。

文 献

- [1]古賀文子、「ことばのユニバーサルデザイン」序説—知的障害児・者の言語的諸問題の様相から—, 社会言語学, Vol.6, pp.1-17, 2006.
- [2]打浪（古賀）文子, 知的障害者への「わかりやすい」情報提供に関する検討 —「ステージ」の実践と調査を中心に—, 社会言語科学, Vol.17, No.1, pp.85-97, 2014.
- [3]野澤和弘, わかりやすさの本質, NHK 出版, 2006.
- [4]野澤和弘, 知的障害者のための新聞「ステージ」, 月刊言語, Vol.35, No.7, pp.60-67, 2006.
- [5]保積功一, 知的障害者の本人活動の歴史的発展と機能について, 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, 12, pp.11-22, 2007.
- [6]羽山慎亮, 活字情報バリアフリーにおける漢字の関わり メディア学—文化とコミュニケーション—, 25, pp.10-34, 2010.
- [7]工藤瑞香・大塚裕子・打浪（古賀）文子, 知的障がい者のコミュニケーション支援に向けたテキスト分析, 言語処理学会第 19 回年次大会発表論文集, pp.280-283, 2013.
- [8]及川更紗・大塚裕子・打浪（古賀）文子, 知的障がい者を対象とした文章のわかりやすさの解明 —季刊誌「ステージ」を対象に—, 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2014-43, pp.1-6, 2014.
- [9]打浪文子・岩田一成・熊野正・後藤功雄・田中英輝・大塚裕子, 知的障害者向け「わかりやすい」情報提供と外国人向け「やさしい日本語」の相違 —「ステージ」と「NEWSWEB EASY」の語彙に着目した比較分析から—, 社会言語科学, Vol.20, No.1, pp.29-41, 2017.